

水見現代詩大賞

2024
白藤書房



冰是現代請大賞

題字・カット

近岡礼

受賞者 崎浜日菜子 はるくり 二名

・受賞の想い 8

・授賞理由 10

〈入選作品 (年齢は応募時)〉

崎浜日菜子 (18) 鹿児島県 12

はるくり (40) 神奈川県 16

阿部静雄 (79) New York 22

ぼんず (22) Vancouver, BC, Canada 24

翁長寧々 (21) 神奈川県 26

露野うた (28) 山口県 30

竹口久美子 (41) 京都府 34

宵闇ことね (26) 香川県 36

石川小傘 (57) 千葉県 44

有馬宇多子 (21) 東京都 50

大西久代 (76) 大阪府 64

三輪優香 (18) 三重県 66

Hideki Fuchi 大分県 76

鈴木和則 (67) 東京都 82

竹之内 稔 (62) 兵庫県 86

碧はる (22) 神奈川県 92

何人 (48) 富山県 98

杉山直弘 (24) 香川県 102

宇田川直孝 (71) 埼玉県 108

葉子 (34) 千葉県 112

大橋里美 (44) 東京都

124

ルキア (19) 神奈川県

126

小川流 (55) 神奈川県

134

鹿狼 (27) 北海道

140

灰野実加子 (39) 東京都

146

神崎政美 (75) 神奈川県

150

湯村りす (31) 千葉県

154

上村実衣留 (33) 岐阜県

162

樋口健司 (66) 岐阜県

166

百野虎子 (38) 山梨県

172

幸あゆみ (55) 大分県

176

芦田晋作 (50) 東京都

178

近岡 礼

180

崎浜日菜子

二〇〇六年、鹿児島県生まれ 春から大学に進学予定(一応理系)

受賞の想い

なにか、私にも特別なものがあればいいのに、と願っていた高校生活。元々文章を書くのが好きだったこともあり、国語の授業をきっかけに詩作を始めました。作文や創作は人よりも得意だという自覚があり、先生や友人にも褒められることがよくあったため、高校生活でひとつでも賞を取れたらいいなと淡い期待を描いていました。けれど、結局、高校生活で私が壇上に上がることはありませんでした。

卒業式が終わり、校門を出る時、虚しさが心いつぱいに広がりました。私は、何者でもなかった。特別なものなんてなかった。手元にあるのは卒業証書だけ。その失望すら忘れようとしていた矢先の受賞のメールでした。自身への失望から救ってくれたのも、また私でした。

詩を書くことは苦しいです。かいても、かいても、満足のいくものを得られたことはありません。この世には美しい作品がたくさんあって、私が生み出すものはその足元にも及ばない。それでも、私はいつかの私のために、書き続けます。

はるくり (筆名)

一九八三年、茨城県生まれ 神奈川県在住 会社員

受賞の想い

この度は、氷見現代詩大賞という素晴らしい賞をいただき、深く感謝申し上げます。身に余る光栄です。

幼い頃から読書が好きで、読むことから、自然と書くことにも興味を覚えるようになりました。

三〇代の初め頃までは、書くという行為がすなわち承認欲求や自己顕示欲と結びついており、書きたいものを感じるままに書けなかったように思います。

次第に書くことに苦しさを感じ、創作から遠ざかりましたが、それでも書きたい気持ちがあることがありました。特にコロナ禍の時期は、書くことで精神の均衡を保ち得たと感じています。

三〇代後半頃から、発表するあてのない文章を書きためるようになりました。今回の応募作は、そうして書きためた作品から選びました。

自分の作品は言葉足らずであると思います。しかし、足りないことから生まれる余白が、ときに思いもよらない場所への扉を開くようにも思います。

今後自然に自由に書いていきたいと思っています。改めまして、この度は誠にありがとうございます。全ての皆様に御礼を申し上げます。

授賞理由

各々に賞金二十万円と硝子のトロフィー

ピカソに静謐で宗教的な青の時代とそれと真反対のキュビズムの時代があり、どちらも絵画史上最高峰に位置しよう。詩にも青の時代のような具象的な表現とキュビズムのような抽象的な表現がある。今回の応募作品にも両方の表現において魅力的な作品があり、今回は具象作品から崎浜日菜子さんとはるくりさんの二名を大賞に選んだ。

AIによつて詩を作ることにも容易になった。けれど決してAIによつては表現できない作品は見分けることができる。それが二人の作品だった。

萩原朔太郎に「竹」という有名な詩があり、これは抽象的表現であるが、いのちの繊細な震えを十分に感じることが出来る。AIによつてはこのような表現はできないであろう。高校生の崎浜さんは、生まれ出づる命への賛歌と罪、不安を、四十歳のはるくりさんは、人生半ばのアンニユイを巧みな比喩力で表現した。また凜とした詩の骨格が二人のどの作品をとつても変らないことが詩質の高さを表していた。

今回は一七四三編の応募があった。

(氷見詩人会代表 近岡礼)

崎浜日菜子(18) 鹿児島

ねがいとはじまり

いまだ小さき命よ

海に包まれ赤く萌え

その心臓は風をも揺らす

あなたがその手を握るとき

おとなたちは耳をかたむける

雨と土が祝福する

太陽は燃え尽きることを知らない

いまだ生まれざる命よ

まだ見ぬ世界は美しく

すべてはあなたのためにある

あなたが未完成の肺を静かに膨らませるとき

魚たちは祝宴をあげる

網にかかった彼らは安らかに死んでゆく

いまだ祝福されざる命よ

神はあなたを選んだ

いのちの管はあなたに絡みつく

この先の道は暗く狭い

世界はこんなにも恐ろしい

それでもあなたは祝福される

春は踊り、夏は光を呼ぶ

秋はたぎり、冬は吊いの準備をする

銀河は永遠の命を廻る

どうか、願わせてくれ

あなたがしあわせであるように

身勝手なわたしをどうか許してくれ

あなたは美しい

あなたは強い

あなたは、

しろいいのち

あなたが死ぬ夢を見ました

私はこちらで

あなたはむこうで

ただひたすらに、わたしは生きねばならないのだといわれました

あなたが死ぬ夢を見ました

形見だと言って差し出されたのは

あなたがいつとう大事にしていた

それは、それは綺麗な石で

わたしは泣きたくなりました

あなたが死ぬ夢を見ました

わたしが死なない夢を見ました

わたしはただ、あなたの後ろの無限の空が

恐ろしいほどに青くて
ずっとずっと動けずにいました

あなたが死ぬ夢を見ました
起きると、わたしは生きていて、

あなたは隣で眠っていました

すう、とあなたの寝息が聞こえて

あなたの心臓がゆらゆらとゆれていて

わたしたちは、真つ白なシーツの上で

しずかにしずかに生きていました

period.

あなたは燃えて尽きるまで生きる

うみ、ヒトデ 闇照らす星海を這う

はるくり (40) 神奈川県

あさり

夜

君は手を伸ばして

夜の浅いところへ手を入れる

やがて

君が引き抜いた拳には

発光する貝がある

それを

台所に持つていく

電気をつけない台所で

片手鍋に貝と水と塩

それから黙って

淡く光る鍋の中を見ていた

お金のない頃は
そんなものばかり食べていた
あの頃はあんなに空が近かったのに
今ではどう手を伸ばしても
空の端にすらさわれない

夜明けの海のはじっこ

夜明けの海のはじっこを

ナイフで切り取って

ポケットにしまう

たとえば

誰かを憎んでしまいそうなとき

それを

まぶたやくちびるに載せて

しずかに呼吸をすると安らぐ

いくらそつと扱つても

海はやわらかなものだから

ポケットのなかで折れ曲り

まるくなり少しづつ蒸発し

最後にはすつと消えてしまう

消えるたび

また夜明けの海へ行く

何度も少しづつそれを切り取る

先日 電車で

よろけたはずみに触れた人に

あなた

海のおいがする

と言われたので

曖昧に笑つて

眼を伏せた

異星の人

目覚めると

寝巻きがすこし湿っていた

夜のあいだ

月に腰掛けていたせいだ

歯を磨く

ゆうべは

異星の人と一緒にだった

遠くから来たと言つて

二枚貝に似た薄い掌

あのととき

キスしようと思えばできたな

別れ際

重力の引き潮にとらわれて

すごい勢いで
遠ざかってしまったから
きつともう
二度と会えない

あのことろ

毎朝

学校へ行くために

電車に乗った

助走をつけて

海へ

飛び込んでいくような気持ちで

ものすごく憂鬱な朝は

ベンチから

動けなかった

スカートの上の陽だまりを見つめながら

うつくしいものばかり夢想した

ものすごく田舎の

ものすごく小さな無人駅

あの惜しみなく差し込んでいた光

よわく吹いていた風

片隅に張られた蜘蛛の巣

ゆるされているかのような

ねむい静寂

いつ逃げてもよかつたし

いま逃げたつていいよ

これからだつて

ずっとそうだよ

阿部静雄 (79) New York

春の風

誰だろう ドアを強く叩くものは
行き場を失った悲しみと絶望に彷徨っている
童たちだろうか
戦火の中で

誰だろう ドアを開けようとするものは
悲しみに満ちた春の風だろうか
童たちの胸を光と希望で癒そうとする
虚無と絶望から抜け出すための

誰だろう ドアを強く叩くものは
死の小鳥となってやってきた
童たちだろうか

私の胸から飛び立って帰ってきたものよ

コリンズ、月の裏側を見せて

私達はどこまでも分かり合えないのだと思った。

事実を言葉で表してもそこから真実は溢れ落ちているし、写真で切り取っても伝わらない温度がある。

いつだって一番大切なことは誰にも伝わらないから伝えない。

その空白、その無音、その不在こそが重要なものではなからうか。

綴られるべきだった言葉や想いは、果たして何処に消えてしまったのだろう。

人は寂しさでできているのだと思う。だから言語を發達させ、少しでも相手の中に自分のカケラを見出そうと努力をした。

寂しいから、脆いから、私達は自分と相手を繋ぐ共感を探す。

言っても伝わらないけれど、言わないと伝わらないから、ひたすらひたすら口にする。

機械的に並べられた音の羅列は、パズルのピースを探す様に。

しかし、言葉や技術は人の心の愛への渴望を潤すには足らない。

私達はあまりにも、あまりにも孤独なのだ。孤独こそが私達を結ぶ唯一の共通項であり、言語なのだ。

人類皆一人残らず孤独で、自分の孤独を伝えるために孤独な表現をする。

噛み殺した、言葉になり損ねた吐息と、

紙に虚だけを残した、汚れ雪のような消しゴムのカスは、

私達から見えない場所で、独り静かに積もっていく。

月の独白と人類の幻想。

あなたからは見えた、コリンズ？

独白

自分の体から排水溝に向かって流れ落ちていく大量の赤を見るたびに、ああ、こんなに弱いものなどに生まれてくるのでは無かったと後悔する。

音が聞こえている。

さつき服を脱いだ。

冷たいのから生温いのに変わる途中。

私は今、シャワーを浴びている。

鏡に自分の姿が映る。

ものすごく太ってしまった時期があつたので、綺麗な体とは言い難いのかもしれない。

綺麗じゃなくても生きていかなければならないと思うと、なんだか物凄く嫌な気持ちになる。

最近はずっとドキドキしている。

なんだかあれに似てる。

小さい頃やった、ブランコの柵をバランスを取りながら最後まで渡り切る事に挑戦する遊
びに。

落ちて仕舞えば楽なのに、時には聞こえてくる友達や家族の歓声、時には自分の中にあ
る無邪気で夢中の楽しさで、渡り切ろうと欲張ってしまふ、ある意味、中毒的な感じに。

シャンプーの出る所を押しかけて、あれ、もう洗ったか、と思ってお湯に浸かる。

家族が多いのと、時間帯が遅いのもあって、このお湯は綺麗とはいえない。

自分の事を誰よりも優しく抱きしめてみた。

この胸など無くなってしまつて良いから、もつと自分を愛せば良いのに。と、心から
思う。

ああ。怖かつたなあ。あの時。

もし生まれ変わる事が出来たなら、強くて傲慢な男の人になりたい。

小さくて弱いものを捻り潰してしまふ様な、しょうもなくて嫌な男の人になりたい。

今の私は弱くてどうしようもない。
もう生まれて二十年。

人生がこの先どうなるか、これまでの感じに分かる様な気がしてしまつて、どうにもまだ何も保証されていない、苦しいけれど美しく、キラキラした前向きな気持ちに、なれなくなつてしまつている。

五、六年前、私の瞳にあつた自己中心的で鋭い情熱の炎みたいなものも、消えかかつている。

体が火照つているのを感じた。

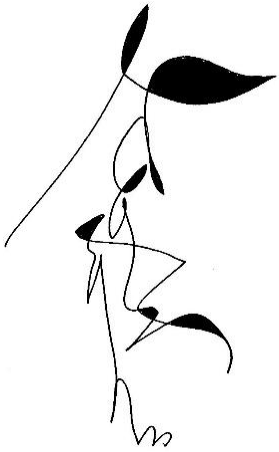
目から何か熱いものが込み上げてきていたので、そのまま身を任せる。

ひとしきりそうした後、かなり楽になつたので、ゆっくり立ち上がった。

頭が真っ白になつてふらついた。

少ししゃがんでからまた立ち上がった。

多分それが私の確かな強さだつた。



露野うた (28) 山口県

さようならのとき

ほどこけた風景に手を振った。行き先は分からないけれど、一枚の切符を握りしめていた。誰もがひとり、ひとりの終点へと向かっていく。みんなが乗り込んでいった電車に、わたしは乗らずに、ただ、ひらすら歩いた。土だらけのスニーカーだけが、踏みしめた時間を知っていた。崩れ出した空の間に、一羽の鳥が飛んで行った。忘れたくないことが増えていくのに、忘れてしまう光があった。溢れないように抱き締めていたのに、すり抜けていった風。柔らかく、優しい感触だけが手に残っていた、だけど、右手に握っていたもの。輪郭は徐々に失くしていく。色褪せていく切符、エンディングだけはみんな等しく用意されている、だから、ちゃんと終わりを迎えられるように、すてきなワンピースを探している。さようならの時はどんな顔をしたらいいのかな、まだ分からないけれど、いつかあなたにも、ちゃんと別れを告げられたらいいな。

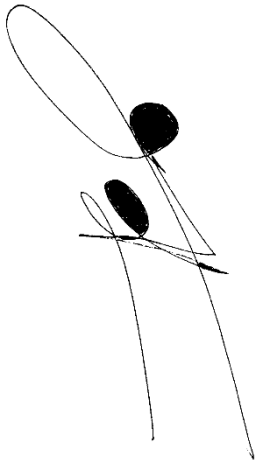
源流

不変のものなどない、体も、心も、時間に流され、形を変えていく。あつ、鳥だ、指さす先にある光る物体。空を飛んでいたものが、星であつても、飛行機であつても、見知らぬ生命体であつても、なんでもよかつた。遠くても、近くても、同じものを見つめる時間があること。美しさも、醜さも、自由に考える心があること。いま、ここで、あなたと共有できる瞬間があること。見つめる先で、あなたの、わたしの、心を知れるのであれば、答えがなくてもよかつた。知らないものを、知ろうとする、見えないものを、見ようとする、すべての思考が、あなたの、わたしの、源流へとなる。

生きる

空が青く沈んでいる。この世界に生まれ落ちたことは、みんな同じはずなのに、心も、体も、別物であつた。何処へでも行ける世界で、何処へも行かないこと、悲しくはない。見つけている景色も移ろい、知っていた人も、それぞれの終点に向かつていく。必然も、運命も、似たような顔で訪れて、人々を連れ去って行く。変わりたいのか、変わりたくないのか、武器も持たずに、生身で生きていく、それが、当たり前のように、当たり前じゃないということ。生きる、ことを続けるための、生活、のなかで、わたし、であり続けるこ

と。息を吸って、吐き出したなかに、少しだけ、寂しさが混ざっていた。与えられた命、いま、ここで、わたし、であり続けようとする。遠くの争いに、祈ることしかできないこと。泣きたい、あなたも、わたしも、みんな同じ命のはずではないのか。平和を食い尽くしてなお、見て見ぬふりを繰り返すのか。テレビの向こうの隣人が、わたしを突き刺した。



竹口久美子（41）京都府

不安

おサンジはメロン冷えてるけどそれでいいかしら

気に入りの小説にそういうのがあった

おサンジはメロンおサンジはメロンおサンジメロン

あの人はまだ帰ってこない

遠雷

サッシをあけて川のようなにおい

北の空は黄色く明るく

落ち葉はひかって銀葉に 風は引きずり流れゆき

いつせいに 降りはじめ 丸い粒の碎け

ひとりごとのバツハ 弾いては立ちあがり外をみる

背の高い草木は垂れ折り

光り、落雷

おサンジはメロンおサンジメロンおサンジメロン

亡くなつて三年め

あとかたもない

あとかたもない

あとかたもない

あとかたもない

あとかたもない

アトカタモナイ

跡形もない

粒子のメイメツはどう？ どこかに？

宵闇ことね (26) 香川県

ダ・カーポ

黄昏色にそまった靴の裏。

張りついた蟻の死骸をアスファルトで擦る。

前日と何ひとつ変わらない日記のページ。

何かが変わると信じて

急ぐ人間の何割が実に愚かだろう。

地獄はこの世の色をしている。

この世と地獄がすり替わることに誰ひとり気づかない。
きつと誰にとつても、今が一番地獄にほど近い。

星が落ちる音が近づく

自然と足が早まっていく

地獄が迫ってくる

軽やかなステップを刻んで追いかけてくる

知っていたはずなのに

知っていたはずなのに？

忘れたのは誰かの意志？

それとも人間の搭載機能？

大切なことも

そうじゃないことも

等しく記録から抹消されていくのに

なんて記憶は色鮮やかなのだろう

痛みも優しさも、傷も温かさも

不条理に降りかかる全てを覆い隠して

地獄は確かに、この世の色をしている

【D. C.】

嗚呼、また今日も地獄が来る。

黄昏色の地平線、墨汁で描いた鴉が群れを成す。

夜は地獄を引き連れてやってくる。

うつくしい死が覗き込んでいる

見初められてしまう

死は救済なんて、陳腐なことば

讚美歌は一歩手前で握り潰す

あやなし、

【Fine】

無

無



夢

矛

ム？

【D. C.】

うつせみ

虚無の輪の

真ん中に現し世

周りに常世

空には可惜夜

虚無の輪を
ゆく一艘
流るる狂想
死の形相

言葉は無く
願いは無く
夢も無く
とおい子守歌が響く

美しい夜は明けること無く
美しい海は流れを止めること無く
美しい風はそよぐこと無く

とうとう、と。
ゆうゆう、と。

ただ静謐を乱すことなく。
すべてが鏡像のように。
だれも触れられない蠱惑の世界。

望む安寧は無く
望む呪いは無く
望む消滅も無く
ただ

とおい子守歌が響く……

伽藍のところに
氷柱のような霧雨

雨は錆を含んで
空蝉まで染み込む

じわり、じんわりと、

ないはずの臍まで染み込む

ぬけがらの果てまで、

虚ろが覆い尽くしていく、

夜のしじまに

空っぽの子守歌が……

反響する

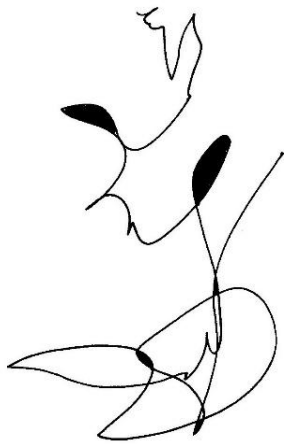
—— 反響する

反響、する

—— 反響、する

ああ、嗚呼、

ぬけがらの先の、□まで、



石川小傘 (57) 千葉県

結露の中の冷えた遊具

「ね？良い街でしょう？」初めてこの街に来た日
ラジオが流れる車から街路樹の揺らめきを
ぼんやりと見ていた

今はもう空の上にいる人の声を聞きながら
誰かを迎えに行く 誰かが迎えられる夜
紺と藍と月と金星について想い
そして

いつか小さい人達が登った遊具は冷えきって
灯りに照らされて移ろい色褪せても毅然と

これはいつかの誰かが旅立った木
どこかのあの子の面影を

冷えたまつ毛の結露が輪郭を隠す暗闇では
形のない痛みだけがぐっすり眠り
結露の雫の中でくると目覚める

あの日 たくさんの人がざわめき
ブルーシートがはられていた公園を過ぎて
私たちはタクシーに乗っていた

「ブルーシートはね、人が亡くなった時に
使う事が多いからね、何でしょうね
だから心配なもんでね
実はわたしは昔は刑事をしてましてね」
バックシートで

子も私もドライバーの声をじつと聴いた奇異な日

声が聞こえる 塾の帰りの子供たち
幼稚園バスを降りた子供たち

歩けなくなった人

一人では不安な人

お歳を召した人 散歩をする人

自分も私の名前も何もかも忘れた人

色んな誰かのさざめき

誰にも同じようにその日はやってくる

澄んだように感じるだけのスモッグの世界を彷徨う恍惚

古い木造遊具は祖父の服の色

小さい人を何度も受け止めた あの日々の想い出が蘇り

まっすぐに街灯を見つめる木目

迎え人達はいちだんと熱を發して息を吹き向かう

冷えたまつ毛に結露の雫だけが寄り添い

空腹の狼 コヨーテ はやぶさ

雪豹やヤマネコの視線になつて

カスケードキンイロジリスは

冷えた岩の隙間から星だけを見つめ
明日の木の実に想い馳せ息を潜める

獣たちの毛皮のぬらめき あの日 木登りをした
どこかのあの子のきらめき 色んな傷みと痛みについて
とりとめもなく巡り

絵のない絵本のアンネリスベットの月夜の浜辺の黒い波のうねり

「アネルセン」かの国では普通の名前

私には特別に聞こえるその響きに浸り

胸の奥のセキセイインコはキュと鳴く

勝手にタイムマシン乗り場だと思った

あの陸橋までもう少し

夜の車たちが艶やかに光を伸ばしてスピードをあげる

過去と未来に煌き 伸びやかな光線を飛ばす

冷えたまつ毛の結露に照らされ

満ちていく想いと思いで出

少年少女たちと強食な動物たち

野生のクリスマスツリーの群れは魅せ

レーニアの岩に小さき獣は潜む

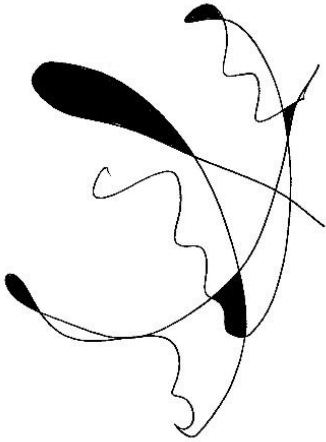
ニヤリと笑う雲と木星 馳せる想い

ここではない熱望する何かへ

どんどんぼやける街灯の輪郭をみつめ

とりとめもない気持ちさをなだめて 迎えに向かう

白い息で



有馬宇多子（21） 東京都

フランケンシュタイン

耳鳴りの夜は

虫たちが僕の血を待ちわびている

蛍光灯に衝突しては

自殺のやり方を示している

大きな希望に突っ込めば

正しく苦しみ死ぬらしい

いちいち見せられなくても知ってる

六月十八日 日曜日

曇り空を吸い込んで頭を痛めましたとさ

きいんと機械的な声が

頭蓋骨の中で響いた

そいつが頭痛と混ざり合ったら

びいんと強く骨が痺れた

頭痛が頭を貫いて

こめかみとこめかみが嘯き合う

フランケンシュタインみたいで

割れそうな頭を

ぐわんぐわんと振り回したら

ぐわんぐわんと頭痛が暴れて

それからちやぽんと静かになつた

もうすぐやつてくる

六月十九日 日曜日

までに

頭痛を引っこ抜いて

蛍光灯のソケットに差し込んで

そしたら虫が寄つて来なくて

そしたら虫が死ななくて

だから僕は見て見ぬふりを

そろそろやめて

だから部屋にこもる時間も

ちよつと減らして

いずれは喋る言葉を携えて

街に出ようと思うのだ

フランケンシュタインみたいな頭から

頭痛を引っこ抜いた頭だから

醜くて

だから何が流れ出して

汚いけれど

きつと出かけよう

だから

今はじつと目を閉じて

耳鳴りだけを聞いている

うちとそと

うちとそと

それだけがある

僕の輪郭はいつもぼやける

電車の窓際にペットボトルを置けば

とてつもなくお似合いだから

それは僕のものではなくなる

だけでも、無理矢理お供をさせる

さっきまで楽しく話をしていたあなたも

手を振りながら外へ出て行く

そとでうちに入って楽しむ

いやしかし、そもそもそとか

痛みは飛んで行かないと

とつくに知っている歳だけど

痛みを怒るぐらいなら飛ばした誰かに
それよりそうだ、社会のせい

うちとそと

それだけがある

僕の輪郭はいつもぼやける

そういえば、居るのか居ないのか

うちとそと

それだけがある

街

薄っぺらな張りぼての

ビルがさくさく立ち並ぶ

人がひとりに耐え切れなくて

騒々しさで自分を誤魔化す

街を歩く

誰よりもずつしりと

ゆるゆるの地面に

ずぶずぶ足がめり込むぐらい
しつかりと

生きて

歩いていくと決めたのだ

ずんずん歩く

主題歌のひとつもなく

クライマックスも見当たらず

だけど

風を切つて歩く

どこまでも歩く

そしたらそのうち空に着く

だから雲をずんずん歩く

ゆるゆるの地面に

ずぶずぶ足がめり込むぐらい

しつかりと

死んで

またその先へ

歩いていく

帰省

実家に帰ると

魂がひとまわり小さくなる

四方八方への背伸びがほどけて

滑らかな球体になる

ようこそとただいまが

ちよんど半々なハタチだ

やけに小さな寝室で

身体がちよつと空っぽで

魂がころころ偏ったり

身体に風が吹き込んで

魂が息を吹き返したり

ちよつとだけ浮きながら

歩き回ったりしている

生きたり死んだり

寝たり起きたり

一度きりだとか繰り返したとか

もろもろ悩む最近ですが

んなことはどうでもよくて

悩みも消えて

実家は気楽です

だからそろそろ離れ時

悩むために出たわけですし

100%のさよならで

いざ

また

西武新宿線

急行が通過する駅で

君は一回生だったな

急行が通過する瞬間

窓を一つずつ凝視して

何かを見ようとしていただろう
誰も知らない街だった
生まれて初めてひとりぼっちで
列車は跡形もなく過ぎた

君はすぐに生活に慣れて
凝視は段々と減るだろう
そんなことはないと言いつ張るが
いずれにしてもしかし
急行は立ち止まらない
車内に何も見出せぬまま
銀色の残響と風ばかりが残る
それは夏には灼熱の壁になり
秋には落ち葉を巻き込んで
冬には君は俯いている
そうして君は歳をとる

最近よく君を見かけるよ

僕は急行列車に乗って

望まぬ場所へと運ばれている

春には君とよく目が合うな

君は僕を凝視する

十八の瞳で

不安でたまらなく楽しくて

これから俯くに違いない目で

幸せにならなきゃいけないと思う

それは君のためだ

遠くなったり速くなったりで

今はなかなか降りられないが

いずれにしてもしかし

終着駅は同じだ

いつか映画でも観に行こう

君は泣かないだろうが
泣ける話題作でも観よう
映画を一本奢れるくらいには
僕も大人になったわけだし

僕は明日の朝も起きるだろう
飛び込まず碎け散らずに
君の眼前を通り過ぎるだろう
未来はいつも少し前には見えていた
だから僕はせめて笑ってやろう
銀色の風の中から呼びかけよう

春には君とよく目が合うな
駅前の桜が満開の今日だ
意味なんて含まずに
花は貪欲に咲き誇る
急行列車は止まらないが

いずれにしてもしかし

桜は咲き誇る

無音の叫びがこだまする

君もそれを聞いたのだろうか？

その日以来

静けさに耐えられないのだ

空っぽに耐えられないのだ

そうして君はやがて俯く

枯れ木のように背中を曲げて

イヤホンを深く差し込んで

僕は明日の朝も起きるだろう

遠くなったり速くなったりしたけれど

君と目を合わせながら

ちゃんと考えているのだ

幸せになろう

それは僕らのためだ
鏡が怖い君のために
僕は明日も目覚める



大西久代（76）大阪府

まぼろしの街で

迷路へと踏み込んだまぼろしの街で

壮絶に咲き誇る花に遭った

一本の紫木蓮の樹は

力をみなぎらせて洋館の庭にある

蒼空に向かい梢という梢には 濃い紫の花びらが

沈黙の形で震えていた

春が薄衣のように降ってきた

意思是遠いところから発せられた

世界の辺境で くぐもる声

そこに居続ける者のみが感知する微細な合図

彼方でチチツ と鳥の音がする

洋館からは物音ひとつしない

切り取られた風景のように
危うさにゆらぐ

いち早く時を感知したものに与えられる企み
頭を垂れ忍んでいつた無念さを胎動させる

それは甦る声それは託された祈り

この地上に立つものの閉ざされた発語

問いかけてくる 私たちに

耳もまた賭けられている

過ぎる刹那の命のありかたを

三輪優香（18）三重県

冬の静寂

北風が裂けた雲の隙間から
光が海を探し彷徨う

波は小さな声で囁きながら
寒さに縮こまる砂を抱きしめる

遠くで軋む漁船の音が
白い霧に吞まれて消える頃
世界はもう静寂に覆われていた

岸壁に立つ一羽の鴉
その影が伸び、縮み、また凍る

凍てついた夜の空気は
肌に触れるたび、言葉を奪う
この孤独も、風も、すべてが透明だ

足元で碎ける薄氷の音が
唯一、今を告げる鐘となり
静寂の冷たさを
さらに深く胸に刺していく

風と海の手紙

風が紡いだ言葉が
波間を漂いながら
海の底で眠る貝に触れる

君の街で生まれた朝陽は
僕の胸を叩く鼓動のように
静かなリズムで照らす

光が踊る海面は
昨日と今日の境界を溶かし
見えない遠い国へと続く

その果てにある夢を
僕は信じてみたいと思う
君が見上げた空に
僕の風が届くといい

海と風が、ふたりの想いを繋ぐ
透明な手紙に変わるまで

足音

凍えた空気が
路地を静かに満たしていく夜
白く吐き出される息だけが

自分の存在を教えてくれる

遠く、雪を踏む音がした

そのリズムは、まるで忘れていた
あの頃の鼓動のようだった

冬の夜の風は残酷で

足音を誰のものとも言わない
ただ、少しずつ近づいてくる

君ならいいのに

そう思うたび、胸が熱くなる

この寒さが、君の温もりを
もつと恋しくさせるから

けれど、足音はふと立ち止まり
闇に溶けていった

僕だけが取り残された路地で
月の光が、静かに肩を撫でる

君は来ない

それでも、来るはずだった足音に
僕は今夜も耳を澄ませる

ほしい、という気持ち

子どもが言う「ほしい」は

小さな手のひらから溢れる

まっすぐな光

その瞳にはまだ

失うことの悲しみも

遠回りの策略もない

ただ、輝く何かに手を伸ばし

触れることで確かめたい
自分の胸が高鳴る意味を

「わがままだ」と大人は言うけれど
それは誰にも汚されていない願い
世界がまだ無限に広がっている
あの頃の私たちの姿

ほしい、と思えることが
どれほど美しいか
願う心があるうちは
その人の中にまだ
希望の花が咲いている

小さな声で叫ぶ「ほしい」という言葉は
時に我慢を教えられ
大きくなる頃には

胸の奥で静かに眠ってしまふ

けれど、覚えているだろうか

初めて何かを「ほしい」と願った日の

胸の熱さを

その気持ち

どれほど透明だったかを

言葉の行方

好きだと伝えなければ

その想いは、ただの影

誰にも触れられないまま

夜の中に溶けていく

目の前の君の背中に

届くはずだった言葉たち

喉の奥で絡まり

風に流されて消えた

好きじゃないのと同じだ

君が知らなければ

この胸の痛みも

君の目の輝きも

僕だけの幻になる

君に会うたび、世界は色づく

けれど、それを伝える術がなければ

僕の心は、ただの空き地だ

何も植えられない荒野だ

言葉にしなければ

君の笑顔をただ見つめるだけで

いつか消えてしまう

その未来を、僕は見たくない

だから今

震える声で

僕は君の名前を呼ぶ

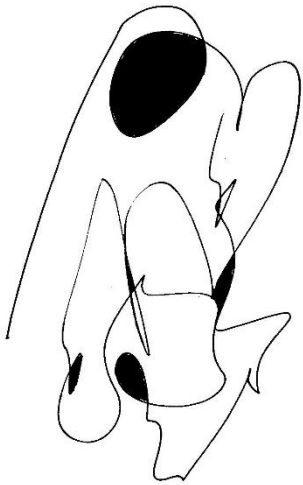
この心を届けるために

好きだと伝えなければ

僕の想いはここで終わる

けれど、君の名前を呼べたなら

世界は、少しだけ変わるだろう



Hideki Fuchi 大分県

ジ・エンド・オブ・ザ・ワールド

あたらしい言葉と

あたらしい瞳

あたらしい世界のなかみ

紛れ込みたい

あたらしい一言

あたらしい涙

あたらしい一人になれる

そこには ジ・エンド・オブ・ザ・ワールド

わたしの心がいま

砕けてはててゆく

それでいい
それでいい
砕けはててゆく

あたらしい言葉と

あたらしい瞳

あたらしい世界の前に
訪れる終わりに

薄紫色に 暮れたそがれる街

人が誰も 人が誰も

急いでる家路

あたらしい言葉と

あたらしい瞳を

あたらしく尽くしてるもの 与えてください
あたらしく尽くしてるもの 与えてください

あたらしく尽くしてるもの 与えてください
あたらしく尽くしてるもの・・・

モア

はてしなく広い空

いまだ見たことのない海

聴くことのできぬ人

夢がかなえばいい

もう 届かなくていい 届かなくていい

届かなくてモア 届くから

五月雨の降る夜

アナログ時計 音 した のに

届かなくていい 届かなくていい

届かなくて モア

はてしなく広い空

いまだ見たことのない海

知ることのない人

暮らしてゐる国の歌

もう 届かなくていい

届かなくていい

届かなくて モア

今日は別世界

そういう一日が終わりそうです

いつもの私に戻ります

そういう人達にまた会いましょう

真面目にやっつてればまた会えるでしょう

そういう一日はだから別世界

あきらめきれない人に

愛ある世界の暮らし

そこで食事をしているあいだ

別世界

町は朝の光り

人々は別に普通

君の怒り、憎しみから遠くへだたれた

別世界のシャッター速度

そういう一日が終わりそうです



フーガ あるいは貴方と私

貴方が生れてこのかた 私は貴方とずっと一緒だったけれど

私が貴方そのものであったためしは 一度たりともない

けれど 貴方は私で 私が貴方であることに変りはない

貴方と私は 鏡をはさんで 向こうに貴方が そしてこちらに私がいる もちろん 向こ

うにいたるのが私で こちらにいるのが貴方であっても構わない 鏡に向つて貴方が 私は

だれかと問うことはない それは 私が 貴方はだれかと問うことになるのだから

でも 私が貴方で 貴方が私でいられるのは 貴方が生れてから死ぬまでの間だけ 私に

は 貴方のように誕生という始まりもなければ 死という終わりもない だから貴方が死

んでも 私は身元不明の死体になることはない 私は死者のように不死身だ

畢竟 私は あなたが発語する言葉 時空を自由に跳びまわることができる だから 私

は貴方でありながら貴方ではない また だれでもないし だれでもある

私は いまここに 貴方と一緒にいる けれど そのいまは現在ではない 現在には過去

も未来もない 現在と未来を柔かく包み込む過去になつたばかりの いま である その

いまこそが 貴方と私が存在する場所だ それは 過去という時間が築きあげた地層 その地層は 現在から未来へと積み重ねられてゆく
やがて貴方はいなくなるだろう 残る私は 私ではない私になる でも 生の終りが死の終りであることを 私は 知っている 昔 ある詩人が言った 「忘却はあたたかく 虚無はやさしい」と 私は いま 言葉として 貴方と一緒にいる
詩人はまたこうも言った「永遠が 雲の形をしてうかんでいる」と

時間の岸辺

禅寺の「水の庭」とよばれる池
にたゆたう睡蓮と濡れた満月
をみつめる塔頭の二人の僧侶
の視線は形而上学

永遠

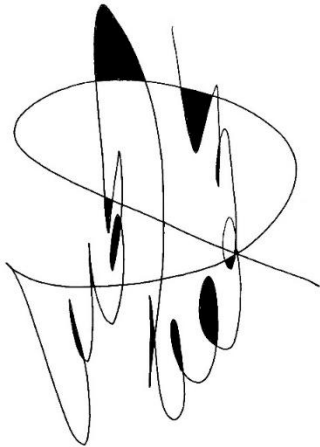
とか

豊饒なる不毛

とか

言葉のない会話が
会話のない言葉で
交わされる
二人の脳髓

かれらは
絵画のような音楽と
音楽のような絵画を
偏愛する贗の芸術家
空間が描く時間の拋物線の
あるいは
時間が描く空間の拋物線の
岸辺に
佇む



竹之内 稔 (62) 兵庫県

異の齒たちの 車内

……異^{こと}の齒は

……ときおり瘦^やさしい包帯の少女に
……抱かれた仔猫の姿でやって来る

一月の朝

永い凍結に倦^うんだ樹の眼をした

通勤客とともに

鉄路の水たまりに 空が映ったホーム

湿った髭面に揺れる赤鼻だからか

計算された人波はみな 喘ぐ僕を花びらのように避ける

誰が見ても危なく見える

茜いろの我儘な息と 管理された朝の階段

《病欠するときも 口頭でなく釣書に一身上書きすること》

ぷにゃあという作動音が

ドアの両歯を

横たわったミイラの口蓋のように開かせると

白マスクの満員電車で 三角耳の額ほどの空間がつくられる

僕もコンクリートの灰いろホームから

両頬の 左右三本ずつの髭で平衡をはかりながら

液体猫のように にゃらりと飛びうつる

林立する樹木たちの モノトーンな隙間へ呑みこまれる

終点まで禁じられた森林のなめらかな息と

激しく響められた koto の ha のザラザラ舌

ここにいる誰もの三半規管が 耳の奥でかぞえている

給料日まで痩せてゆく 漆いろの素数たちと

こころのゾウのひび割れた表皮が鼓動する

重さと 残り十一ヶ月の渴いた骨の息遣い

白い息で磨かれた たくさんの異齒^{ことば}たちが

一日の始まりまで ひっそりと待機する白のビル街へ向け
やがて

氷結した発車ベルが破る

僕の三日月形の虹彩と

ひげたちの 刻^{とき}が

ただ一人

遺^いの血の脈動をつたえている 沈黙の車内

喰い散らかされる ゲンシ

本場 広島で食べた味を思い出しながら

宝塚市で食べる 広島風のお好み焼き

〈広島焼き〉とは呼んじやダメだよ

大きな鉄板で

お店の女性店主が焼く

店内に広がる キャベツのあまい匂い

粉と粉のあいだに挟まれる 焼きそばの塊

一九四五年八月六日があるから

焼けるまでの間

たくさんのことばが行き合う

仕事のこと どこから来たのか

先週のこと 昨日のあったこと

天気 景気 税金 ゲリラ豪雨のことも

幻視してしまう 二〇万年前

しとめたマンモスの肉を洞窟で焼いている時

飛びかった シンプルなことばたち

日付のなかった時代の〈昨日〉や家族のこと

〈未来〉というコトバもなくして想像できない先のこと

それは〈明日〉の〈明日〉の

そのまた先の〈明日〉のこと だったか

陰鬱で寒いばかりの やがて〈冬〉と名付けられる期間が 雪と氷の溶けた気持ちのいい
〈春〉の日にとって代わること なのか

二〇万年後の〈科学お好み〉が

こんがり焼けた肉と骨の欠片を
喰い散らしながら

〈美味しい〉と 原始のコトバを吐いた

知恵あるはずの ホモ・サピエンスたちの

起こした 原子の火炎竜とキノコ雲

たくさんの〈名づけのコトバ〉に囲まれた コトバの長者サマな

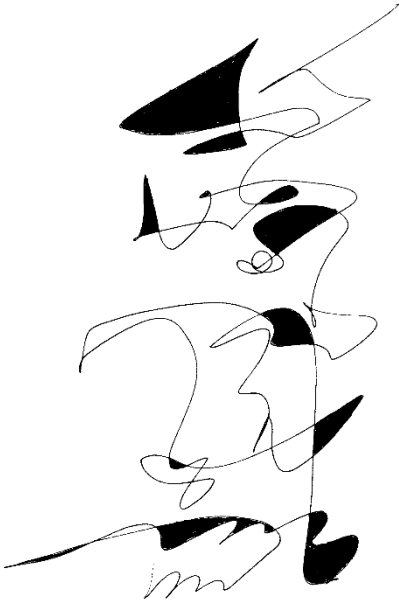
現代サピエンスの 男ひとり

ゲンシの科学で 焼かれた

〈お好み焼き〉を いま 口へ運ぶ

はふはふ はふと洩れる声 と 二酸化炭素 喰い散らかされる

ゲンシの映像 と 地球の姿



碧はる (22) 神奈川県

ゼラニウムルーティーン

やわらかい丘

その真ん中に

おおきい鏡があつた

稜線のおくのおくの

おくから

ぼくが駆けるのとおなじように

鏡うつしのきみも駆けだす

まばらに生えそろつた夏草の

丘の

一部を

目線で刈りとりながら

ただただ向かつてゆく

互いにちかづく

こちら側に周るような景色の展開図
膨張されていく鏡の前で
逢う／逢うがいつしょにおこる

ぼくは

鏡面の、まえで

すこし髪をなおしたりする

風に頬を掴まれるようにして

入念に顔を動かし

確かめたりする

「水の事情と黄色のゼラニウム。

ぼくたちはフラワーショップで最初のゼラニウムになった。

いけても。葉にしても。つるしても、そのまま眺めてもいいのに。

その胸ポケットに入れている。」

その胸ポケットに入れている。」

いけても。葉にしても。つるしても、そのまま眺めてもいいのに。
ぼくたちはフラワーショップで最初のゼラニウムになった。
「水の事情と黄色のゼラニウム。」

気になるところが気にならなくなる頃

さよならも告げずに

半周したせなか きみのせなか

いそいで丘をくだるきみは

あのと きもそうだった

まだ

まだ

鏡越してもこうして

逢ってたいのに

きみとぼくの

丘の真ん中に隔てがあっても

その向こうに確かにいる
そうやって確信し合いたいのに
全くおなじ軌道で半周する
きみと全くおなじぼくのせなか
自認の同極性で反発していくね

思いきり外す天気予報の

まだ温い涙は

頬を垂れる数秒間を必死に生きて

風のゆりかごで

冷める

それが丘と繋がって

やわらかくなる

その丘はしつて

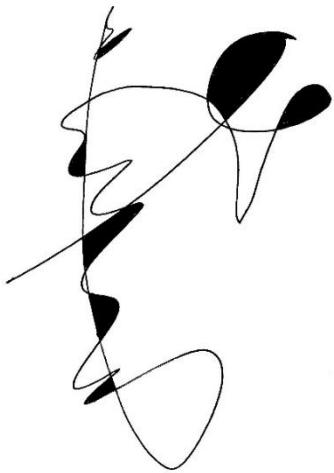
こんどはちよつとずつ離れてゆく

駆けて消えるきみ

おなじように

丘しかみえないぼく
夏草の背丈がさつきより邪魔に思える
突風も大嫌いになれる
皮膚上で踊る水滴たちは
もう蒸しばみか涙かわからなくなれる
鏡うつしのぼくたちは
下った丘のさきで

また



何人 (48) 富山県

チヨコレート

今、その目の前の、ゆっくりあなたが眺めている視線の先が、
実はものすごいスピードで繰り返している生死の瞬間であるとあなたは気づいた。
あなたは気づいてすぐに、思考回路を奪われた甘ったるいチヨコレートのように
ぐったりと、まったりと、どこまでもとろけていく流れのように伸びていく両手を
ゆっくりと交差させて、地球をぐるぐると何度も抱きしめ、その両足が立っている
重力の塊りの中心へと向い、しっかりと開かれた両の目は、とりとめもなく溢れては
シャボン玉のようにパチンと弾ける命の輪郭を辿っている。あなたはとても几帳面に、
とても正確に、脱いだ靴の踵を揃えて、すぐにそれらを振り切るように一杯投げつけて
考える。「わたしの名前は？」「わたしの名前は？」左にばかりずーつと曲がり続けて、自
分の名前を、隣の家のごうごうということもない犬に向かって投げつけて、
返ってくる声を耳に絡ませて、急に立ちすくんで、急に座り込んで、急に笑い出して、
急に坂を転がりだして、回転の中心へと向い、ココロは遠くへと広がりながら、

つまりそれは、それであつてそれではなく、何か自分はしつかりとこの手で掴んでいるのだと夢と夢の間にすらそう思い込まなければ、すべてが、すべてはコトバ。コトバ。コトバ。「コトバでしょう？」と、地下鉄御堂筋線の天王寺方向へと向かう電車の、四両目に乗っている肩につくぐらしいの髪をした、小さな本を広げている女がそう言った。誰かさん、誰かさん、誰かさん、誰かさん、誰かさん、誰かさん、あなたはだあれ？ あなたは誰？あなたは誰？あなたは、わたし。

白い犬

青青とした草が生えていて

そこは雲の上だった。

神様は、居留守中で、

白い犬が、わんわんと吠えていた。

わたしは、目覚ましを かけ忘れた。

わたしは、目覚ましを 振り忘れた。

わたしは、目覚ましを 叫び忘れた。

わたしは、目覚ましを 叩き忘れた。

わたしは、目覚ましを 食べ忘れた。

わたしは、目覚ましを 数え忘れた。

わたしは、目覚ましを 落とし忘れた。

わたしは、目覚ましを 起こし忘れた。

わたしは、

わたしは、忘れた。

わたしは、目覚ましを 知らない。

結局、あなたは居なかった。

結局、あなたは居なかった、のだ。

白い犬は、飛行機になって、

恐竜と交尾している。

綺麗な虹が、足首だけで並んでいた。

やがて世界の輪郭は、くずおれていく。

目覚ましは、

どれくらいわたしを思い出そうと、したと
しても。

杉山直弘 (24) 香川県

微熱

解熱剤は消費期限切れだった
薪のような一日が続き
あの夕焼けが、触れよ、と
買い物袋を抱えたまま西へ
西へと手を引かれた
街の人、みな真剣な眼差しで
匂いを飲んでいた
なるほど、何かが燃えていた
藁のような、烏賊のような
何かの燃える匂いがしていた
—
おおきなものが
おおきく死んでいる

ぼくたちはできる限り

おおきな死のために開かれている
すべてのひらかれていく身体は

石の並んだ緩い坂の下へ
きえていった

大人たち

石のない墓

小さな土の山

幼年にパラバルーンのなかで見た

はじめての光と

たくさん顔

ぼくたちはおおきな死のなかにいる

水臓

水面が揺れている、水面が、水臓の

魚の群れが、顔をうずめる

あつさりと、色になる

餌をまつている

魚の群れが

落ち着いた、わたしの居場所を

手のひらで隠すように

毎日は笑いながら、こちらを向いている

たかい、口角が引き攣る

声、顔は静まり

河口がひろがっている

やわらかな火種が

すみやかに消えていくように

この河岸に積み重なった

死骸が、ばらばらにくずれて

餌を待つ

餌を待つ、魚の群れが

水臓の水面を埋めて

額を日差しに殴られる
人々はそくさと逃げ
魚は餌を待っている

予感

なにかを隠している
手のひらで覆い隠している
そのままこちらを向いて腰を下ろして
わたしをじつと見つめている

ここから見える景色が好きだった
夏の盛りを迎えた公園で
猫じゃらしが群生している
介護士が老人の顔を覗き
やわい会話がゆらゆら

／kaipek＝

なんの声？

かしげた犬の首につられ

言葉がにげて

徒渉池で魚が産まれた

南国の遠洋漁業で

網目に押さえつけられた

発声された異形が

イキ、イキと暴れる

老人がこちらを睨んでいる

視線を確かに機能させた、発声は

ゆるやかな予感、たしかに

なにかを隠している

手のひらで覆い隠している

わたしをじつと見つめる目をして
わたしをじつと見つめている

宇田川直孝 (71) 埼玉県

陽炎

房総の小さな駅に降りた

二・三人の客と一緒に駅舎を出ると

駅前の小さなロータリーには潮の香が流れ

夾竹桃が陽炎に揺れていた

人通りも途絶えた

梅雨明けも近い夏の日差しの中

私は一人夾竹桃の毒々しいピンクの花が重く咲き乱れる道を

海へ向かって歩いていった

アスファルト道を砂が少しずつ覆い始めたころ

海が見えた

小さな入り江の砂浜は

まだ人影も少なく

夏本番前の妙な静けさに満ちていた

砂浜に腰を下ろす

打ち寄せる波の音を心地よく耳に刻みながら

私は何をしにここへ来たのかを考えていた

「海の匂いと波の音が：入っているのよ」

そう言つて母さんから手渡された

小さな名前も知らない巻貝一つ

若くて綺麗だった母さんと過ごした

短い夏の思い出がそこに閉じ込められていた

あの巻貝を 記憶の彼方に沈み始めている思い出を

私は求めにやつて来たのだろうか

何もかもが陽炎に揺れている

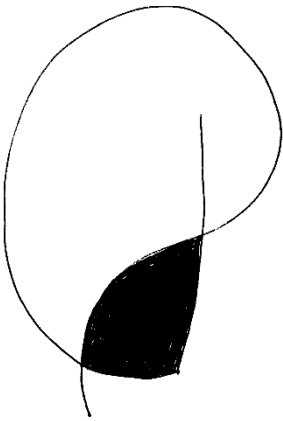
目の前に浮かぶ船も浜辺を見下ろす民宿ホテル旅館

釣り糸を垂らす人砂浜を歩く人

すべてが「ダリ」の絵の中にあるように時を歪め

廻りながら母の姿も幼い私も

いま陽炎の中で深い記憶の間に揺れている



葉子
(34) 千葉景

さよならジェフリー

ある日、骨格標本を買って名前をつけた

おはようジェフリー

三十二歳の初夏に記憶を失くした
ばらばらになった私の人格たち

不気味だと思うでしょう

怖いんでしょう

子供の頃みんな私の悪口を言っていたわ

学生時代のアルバムはとうの昔に破り捨てて

田舎を捨てて

どこまでも逃げて

あなたから逃げて

知らない街をいくつも歩いたりした

それでも孤独は追いかけてきて

私の脳を爆発させた

つらい過去が残るこの町なにか始まる？

もう私は私の顔も思い出せないわ

寂しかったよね

お薬飲んで

おやすみジェフリー

あたらしいわたしを作り直すしかないの

長い間、一緒に居てくれてありがとう

さよならジェフリー

ダイアリー

夢みたいな数年が過ぎていつて

例えば足柄のサービスエリア

背中にお釈迦様を彫ったお姉さんに混ざって

お風呂に入ったよな

夢みたいな数年の中の微かな思い出

あこがれのふつうのひとつにはなれなくて

ひとりで飛行機乗って札幌へ逃亡

動物園と温泉と珈琲が香った

自由に生きていけると思った

ほんの少しだけ、ね

未練はあるのでしょうか

障害者手帳をめくって見る

世界は目を覚まさない

ドトールもスターバックスもドンキホーテも
舞い戻ったこの町には無いんだ
もう帰らないと決めていたのにな、なんて

自由に生きてはいけないと知った
もう充分だ、ね

未来はあるのでしょ

ほんのちよつとだけの希望と絶望が
毎日変わるお天気のようにくるくると廻るの

障害者手帳をめくって見る

世界は目を覚まさない

わたし、どうやって生きてきたのでしょ
若さと悔しさを消費して

障害者手帳をめくって見る

私は私だけど

世界は変わりっこない

日曜日から月曜日までを繰り返してゆくし
とりあえず一日は二十四時間しかなくて

馬鹿な私は何も覚えられやしない

死に損ないのミュータントみたいな生き物

夢みたいな数年が過ぎていつて
とてもたのしみで少し、こわい
ここからも夢を見るのでしょう

障害者手帳をめくって見る

これが私である証明で

世界は変わりっこない

死ぬほど好きです

三寒四温が続く日々です

ここにはなんにもないので

死ぬほど好きです

死ぬほど好きです、と

ドラマの中でヒーローが言ったよ

僕はもう働けないし恋もしないから

美しくいなくてもいいはずなのに

たまに出かける日は

どんなメイクで

何を着ようかと思いを巡らせる

死ぬほど好きです

死ぬほど好きですか

ドラマの中でしか言えないセリフだ

記憶はすらすら消えていくので

毎日誰にも見せない日記をつけているのです

三寒四温が続く日々を

ただだからだと続けているのです

あなたは好きですか

誰かを死ぬほど好きでいますか

死ぬほど好きです

死ぬほど好きですか

そんな想いが

ドラマの中でだけでも報われますように

恋をしない私が祈るよ

愛を捨てる

夢のような儂い恋をした つてき

いつもその度に身体を壊すから

よくあるストーリーにもラブソングにも

いつも少しも

共感できなくてさ

つまらない 退屈だ

夢のような儂い恋をした つてき

結局また怖がられてお終いになる

私は誰かを愛してはいけない人間なのだと

深く学んで 今日を生きて

つまらない 退屈だ

あなたを愛した瞬間にだって

絶望の底へ 落ちた

神様 から 愛を 禁じられてるみたいで

つまらない 退屈だ
さようなら

願いをすべて捨てて 去ろう
私は私に 愛を 禁じて生きる事にしたから
つまらない 退屈だ

あんな事になるなんて思ってもみなかった
失った記憶は戻らない
私は私に 愛を 禁じて生きる事にしたから
つまらない毎日を
選んでゆくから
退屈な毎日を愛して 生きながら
さよならを待っているよ

夢の話

あなたは迎えに来ないから

わたしはひとりで生きてゆく

記憶を失くす日々を繰り返し

あなたのしあわせはなんだろうと思いを馳せる

答えは知らない

知る術はどこにもない

あなたが迎えにもしも来たら

わたしはたぶん躊躇わない

記憶を失くす日々を繰り返し

たてた誓いを破らない事を誓って生きる

正しいか知らない

知る術はどこにもない

あなたを忘れる日が来たら

それが「しあわせ」なのかしら？

もしも会っても、すれ違っても

記憶の無いわたしは気がつかないのでしょう

好きな人とはこわいひと

恋とは恐ろしいもの

恋をしないわたしの恋のかたち

いびつで透명한触れることのできないもの



大橋里美（44）東京都

優しい世界で生きている

慌ただしく行き交う人混みの中でも、一瞬時間が止まる感覚に陥る。それは優しい視線を感じた時だ。

母を乗せた車椅子を押す。エレベーターの聞くボタンを押して待っていてくれる柔らかな指先。温かな目線。穏やかな声。それら全てにありがとう。

母の手を繋いでゆつくりゆつくり歩く。ふわつと風が吹いた。母の帽子が飛ばされる。スヒードを上げて走っていた車が徐行して、助手席の窓から母の帽子が落ちたことを教えてくれた。立ち止まってお礼をする。母を支えていた手を解いて、数歩後ろに落ちた帽子を拾いに行こうとすると、視線の先には逞しい腕。男性が母の帽子を拾って渡してくれた。温かな目線。穏やかな声。優しい行動。それら全てにありがとう。

母の記憶を取り戻そうと、大阪にある母の実家へ行った。祖母が亡くなって、家は壊され駐車場になっていた。車が何台か止まっている。駐車場を見ても母は何も言わない。分か

らない。記念に母と並んで写真を撮った。それを見た父が一言「ごぼうと大根。」と言った。

降りしきる雨の中、傘もさせずに車椅子を押す。

母が濡れないように、一つの傘を母に持たせて。

雨と傘で前が見えない。ずぶ濡れになりながらも

ただただ車椅子を押す。母が風邪をひかないように。早く帰る為に、家路を急ぐ。

グラタンは良い。食べやすく口の中に食べかすが残らない。母の歯を磨く時に磨きやすい。

鯖はダメだ。チキンも。

ルキア (19) 神奈川県

バスケット

バスケットで見えなくなつた

じこのブングルイ

指の先で幻影 裏返つた

帰りの カエルの死骸 また 吸われていく

明日に果物は ラップの下で 色褪せている

どこかに未来はないか 内科を訪ねた

解答をのぞくように 私はワラツタ

キカイ音痴だから 友達は泡の中

夕暮れは 挨拶に反射して 滲んだ

さよなら さよなら

この日に会えたこと 正しい人

明日は君のため 今日是你のため?

為 ため込んだ ため 偽善のため
隠れないで 為にならない

晴れにならない 腫れは消えない
円形に椅子を並べて 並べて

ずるっ子の負けっ子

終われば

最後の不憫な子

みんな幸せな

言いなりっ子

終わらない生活

終わらない空

終わらないペイン

終わらないレイン

今日 独りだった人！

憂鬱な電車内から

羞恥に走った快速急行

なだらかな夜景は無口に

人と別つ道で消えた　イタイもの

まだ残る写真

脳裏で暴れる初恋

僕は外行きができない

食事が人より各駅で

遅延証明書の発行は届かない

食事は人より恐怖のつり革で

喉に突き刺さった「情けない」

「つまらない」のテロリストが

優先席に座っている

怖いんだよ　誰も見えない

透明な 心の 不透明な 理想

対面で見ると 憐れむ表情

青空はいつも 雨が 雨が

降りそうだ

孤独者に安らかなパンデミックを

屋根裏にゆれる 未来の影

毎日が羞恥の 夜行列車 光はどこか

離れていく 離れていく

週一の 自殺願望で見る車窓

ああ 幸せに震える 明日は

どこに死んだろうか

愛悼

小説に ならうように

愛は修飾をかさねて

輪郭はあなたに ならうように

ほそい指の腹で

めくられていく景色が ありましよう

なべてニヒルなヘッドライト

夕暮れを忘れた街

静かな鈍色に

光は 死んで いくでしょう

ゆるり ゆるり

とうめいな灯り

消えていく バイバイ と

どこに向かえば心臓は

どこに向かえば呼吸が

血溜まりの蝶に

きらびやかな願望

その命 尽き果てましよう

からり からり

肌にのこる 枯れ模様

心のままに 落ちてゆく

物語にあなたを貼りつけて

生きようとは

街は晴れの日に泣きましよう

私は雨の日に笑いましよう

ヒュラリ ヒュラリ

流れる垂れ目に見送った流星

バイパスの通りでは

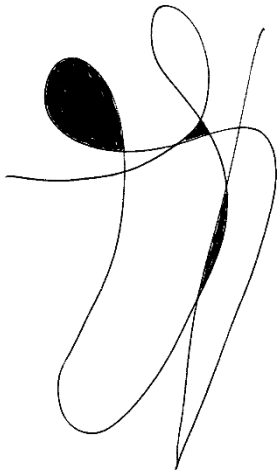
騒がしいテールライト へと 涙も

ひらひら 影っていくでしよう

慈しみのかぎりに

ゆめゆめ あなたを

わたくしは
恨みましよう



小川 流

(55) 神奈川県

残暑と腸炎

晴れた秋の日

光の中で りんごの皮をむく

静かに ひとかじり

口内で 何度もかみしめて

りんごの液を 吸っていく

樹液で 命をつなぐ甲虫のように

いまは ほかに食べられないのだ

経口補水液も 白粥も

どうにも しんどく

美しいりんごに 手を伸ばした

腸炎 二日目の朝

噛むたびに ほど良い水分が
身の裡に 染みいつてくる

赤く実った果樹園を

初めて見たのは 幾つこのころの旅だったか

昔 移動販売の八百屋さんが

軽トラックから流していたのは

りんごの唄の 哀切に満ちたメロディ

少女の耳で 遠くから聞きつけた抒情歌

買物かごに ガマ口を入れて

おしゃべりしながら 母も 近所のおばさんも

空地の前で待っていた

シャクシャク シャクシャク

すっかり体温になつたりんごを

ゆつくりゆつくり 飲み込んでいく
いまだ残暑の木漏れ陽はまばゆくて
あの頃 母はいまの私より若かった と気づく

残暑の庭を眺めながら

シャクシャク シャクシャク

太古の祖先が消化した果実の栄養

秋の美しい光の中 私は猿にかえっていく

トーキョー 師走 2024 夕暮れ木立

日没の残照は 天空に向かうにつれて

朱色から群青へ

昔 知っていたカメラマンから

マジックアワー と教わった時刻

西多摩の稜線には 木々たちの影絵

向かいのマンションの五階ほどの高さで育つまで

この丘には

伐採も 造成も

あるいは

大火も 地震も

あるいは

空爆も 戦争も

なかった

こと を意味する

あるいはそれらの出来事が起きたとき
この木々たちは生きのびた
こと を意味する

いくどの晦日 いくどの元旦

いくどの夏至 いくどの冬至

いくどの晴れも いくどの雨も

ただ

空へ 梢を

地へ 根を

背丈に歳月を宿した雑木林が

夜の黒に沈んでいく

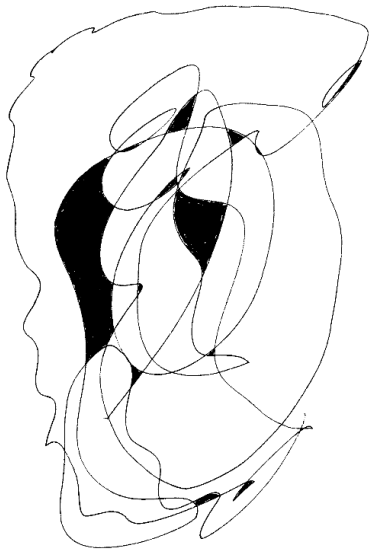
LEDがアスファルトを照らし

高速道路は帰省渋滞

木々よ また あした

どこで会っても

君たちは 懐かしく 親しい友



鹿狼
(27) 北海道

闘争

私たちの肉々は

まろくまろく造られております

風をいなし

水をいなし

ぶつかり合うても碎けぬように

まことにまろく造られておるのです

まことにやわく造られておるのです

さらには硬き骨たとして

手にとりなめてはまろいのでありました

節々のコブはつるんとまろく

角ばりなく尖りなく

きつとそれは血を流さぬようにと

きつとそれは肉を断ち切らぬようにと
まことにまろく造られておるのです

ポキンと折れたそのときのみに
骨はキトンとささくれ立つのでありました

しからば私たちのこの刺々しさは
何処より憑来するのでありましょうか

尖りをみせる二対の犬歯ばかりが
その答えを知っている気がするのです

楽園

成層圏のグラデーションは
私の頭をグラグラと揺らして

まるで私は宇宙に独り

成層圏のグラデーションは
私の瞳をグルグル回して

まるで私は空中に独り

はるか足元に雲は敷き詰めて

私と世界の壁は厚く

しかしズボンと抜け落ちてしまえば

真綿の雲に首を吊って

まるで私は世界に独り

贅沢

喉奥に人差し指を突っ込んで
食い散らかしたピザのカケラを触り当てる

薄緑の陶器に顔を突っ込んで
飽食の世界を少年は呪っていた

(まだ足りないか。まだ充ちないか。)

(……いいえ、もう何も、欲しくはないのです)

世界が少年を白い部屋に閉じ込めて去った

夢

足の裏の凹みが少女の円やかさを攻め立てている
足の裏の凹みはしきりに痙攣して

足の裏の凹みはこれ以上の希望を赦してやらない

足の裏の凹みは少女の軽やかさを妬んでいる
足の裏の凹みがピクピクと脈打って

足の裏の凹みはこれ以上の絶望を赦してやらない

足の裏の凹みは少女の幼さを夢想している

凹みが凹みでなかった時

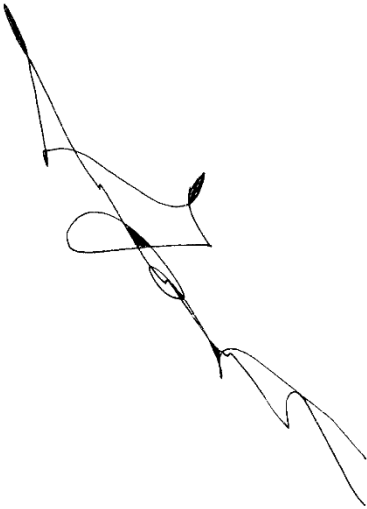
ともに地面を踏みしめた時

いつのまにか少女は歩き方を覚えて

足の裏の凹みは少女の賢さを怨んでいる

アスファルトの硬さを知らずに

アスファルトの茹だりを知らずに



灰野実加子（39） 東京都

はなれんで

はなれんで

いつか生き物になるそれ

たぶん赤黒い、どくりどくりとした脈動

怪物のように見えるそれが

知らないうちに知らないうちに

命をふくんで満たしていく

はなれんで

はなれんで

いつか生まれるこれは

たぶん人間の色をして

ここにいる日を数えている私が
知っていても知らなくても

龍のように蛇のように

動きを伴って内臓を探しあてる

はなれんで

はなれんで

二度とはないその日。

虹色のような閃光に

届くかぎりの宇宙に腕も足も突っ張って

どうにもならない私という通り道を

ただひたすらにカラにして

とうとうとうとうと

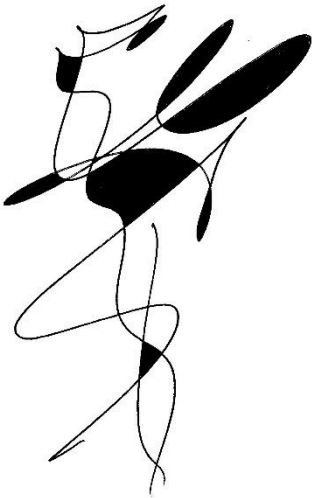
道をあける

はなれんで

はなれんで

願えども願えども

私を通りすぎるだけの



神崎政美 (75) 神奈川県

キジバト

川のながれのようにゆつたりとした目覚め
外に出れば目頭に陽のしずくがそそぐ
陽を厭うように細き小道を降りて行く

泉にて朝の整いを整える

キジバトの胸の十字架に両手を合わせ感謝する

また新しい一日を迎えることのできたことに

老いたひとは五月の大気の匂いのなかを歩いて行く

なめらかなかがやいている優しい口

ことばの香りがあたり一面に

広がるようにと並木の木々に告げている

畑に来て農夫は一日の 昨日の続きの作業を始める

しかしまもなく老いたひとの顔には

よろこびとかなしみが交互に現れ作業ははかどらず

刻まれたシワの深さには人生の色が濃い
かれはもう七十歳

妻も子もおらずひとりでこの十年を閲してきた

夕暮れに向かう陽の輝きに

一日の無事をありがたく頂戴して家路につく

足取りは膝の形のように重い

夕暮れを見つめる目には

闇のしづくが落ちて来て眠りへ誘うが

まだ今日の最後の感謝にたどり着けず

夕食は素朴な形で終える

眠りの前に日記を開く

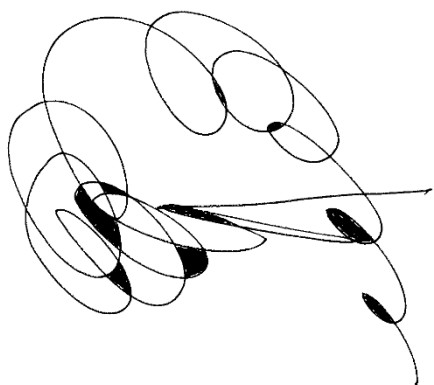
今日の一日が静かに書きつけられる

ああ が文章の最後のことばなり

さあ今日への感謝をことばに出さずに

キジバトが眠る森に手を合わす

夜は明らかに老いた人に憇いをもたらず
目頭に手が置かれかれは目を閉じる
すると夜も同じく目を開ける
朝の来ることを老いた人に誓いながら



湯村りす (31) 千葉県

パンダのコアラのマーチングバンド

冬の抜けるような空にアドバルーンが上がる

意に反することなく

パンダは広告塔だった

ストライキの機会を伺う駒鳥たちが

即座に萎びてゆくほどの単調な音楽

その白い音楽だけが

とりとめのない鼓笛隊によつて整然と運ばれていき

シユプレヒコールは午後を切り裂く

行進を続けるのは誰だ？

パンダはうんざりしていた

黄色い声はもう沢山だった

目がまわるから手を振らないでほしかった
もう誰にも見られたくなかった

コアラは今日も不在だった

それでいて誰にも咎められない自信があつた

音楽は耳を澄ませて聴くもので

カーニヴァル
街は物陰から見守るものだった

だけど本当のところは

もつと誰かに見てほしかった

What a great advertisement!

英国紳士が叫ぶ

アドバルーンが弾けて

飛んで 飛んで 飛んで トんで とんで！

教頭先生の頭に舞い降りた

その一連の事象は音楽の暴走を助長させるが
パンダの横顔がニヒルに見えたから

私は行進をやめた

ポプラ

二十一世紀に入ってからよお

随分と触れられないものが増えちまつたな

ポプラの赤看板の下でビール缶を弄びながら堅田先輩は呟いた

この人は時々遠くを見て

帰るべき場所があるとでも言いたげな顔をする

あーインターネットでやつ、つすよね

紙の裏のでこぼこした筆跡とかページを捲る音とか

忘れられていくのかなあ

おれは空になつた缶に目を落として

思考のうわずみの方で考えるふりをした

どうにも壊れそうなものばかりを好きになつちまう

先輩の好きなものつてなんすか

なぜだかその問いが喉の奥に引つかかつて

慌てて煙草の煙で誤魔化した

二人は沈黙の夜をバイクで流していつもの交差点で別れた
それからすぐに先輩は東京に行つて

おれは仕事を休みがちになつた

二〇〇三年の初夏のこと

あの頃は憧れなんてのはもつと遠くにあつて
だけどある日突然思いもかけないところから
ひよっこり顔を出してくるようなもんだつた
乾き切つたアスファルトのなにもなさ
ちりちりと胸の焼ける匂いがする

二〇二五年、先輩今、何してる？

アドレスは聞き損ねちまつた

この空っぽの貸駐車場は昔

おれらの溜まり場 ポプラだつたんだよ

月と私と

きれいな形のきれいな緑

皆の手に南瓜が行き渡りました

だけど私のところへ来た南瓜だけは

黄色くひしゃげて半月型

思わず顔を顰めてしまいました

仕方なく広げた両の手に

控えめに腰掛けている月は涙を浮かべることもしせず

年老いた象の目で優しく微笑んでいたのでした

絵手紙の教室に通っていたことを思い出しました

静物のその個性豊かな凹凸を描くのがどうにも気恥ずかしく

私の描いた檸檬はさながら兎のいないお月さまでした

「素敵な檸檬でしょ。こちらのお嬢さんが一生懸命描いたんですよ」

なんて先生何気なく言うものだから

私は慌てて赤面したものです

ねえ先生、あの檸檬は怒っていませんでしたか

冬の夜は白い

白いからといって

ムーンライトのひとすじは不可欠で

あらゆる物体の質感があらわになる

きれいな野菜から売れてゆく八百屋で

半額シールを貼られた小松菜が

ビニール袋いっぱい汗をかいていた

生産者の名前は滲んで読めなくなってしまった

四角く整った部屋で白々しく私は

今日も夜空に願いを捧げています

七並べ

森は散っていた

声は枯れて茶色く

その代わりに巨大な

孤独さえも知り得ない
灰色のビルが建てられた
トロールには会えずじまい
こうして街は作られていった

秘密の裏路地で

なんと僕の言葉が

売り尽くしセール中

読むという高カロリーな

行為は愛／君の愛が欲しい

十二カラットのチープな心臓

一掴みで驚掴みにしてあげるよ

水も滴る木も眠る

ダイヤの驢馬は

嘘つきダリヤ

丑三つ時は

逢魔時さ

凌霄花

百合

菖

死神の唄うバラードも

スペードに隠された

逆さまのハートも

王様の冠に少し

似てると思う

ここだけの

内緒話よ

上村実衣留 (33) 岐阜県

星の約束

月光の雫が

靴を走り

雲間の内緒が

そつと交わされる夜

まだ見ぬ君の

夢の形 描いて

僕は 軽やか

とつとつと

街の喧騒は幻想の構造

とつとつと

凡庸な ただ一つの愛

月光の雫が

キリリと冷えて

宇宙の眞実は

東の空に 北の果てに

咳 ひとつ

あなたを想つて

とつとつと

とつとつと

街の喧騒は幻想の構造

揺れる定期券

筆先に宿る 確かな私
月光の雫を浸して
綺羅星の約束は
私だけのもの



樋口健司 (66) 岐阜県

沈黙

峠を越え 町との境界にかかる

巨大な吊り橋を進んでいくと

眼下の黒い大地に 眩い光の点が

揺れ動くのが見えてきた

何十万 何百万と言う人々の生活の営みが

無数の光の下で延々と繰り返されている

月明かりを頼りに

遠い昔 意中の人と歩いた河原を思い起こし

言い知れぬ寂寥に 身を浸す

無情で冷たい風の なんと心地よいこと

闇の底から靡いてくる

風鐸のまろやかな響きが 程よく

孤独と溶け合っていく

この肉体には ずいぶんと世話になった

居心地の悪い時

自身のふがいなさ 情けなさに

どれほど失望し 涙を零したことが

時に 自身の肉体にも居場所を失い

尋ね人 待ち人とも無縁となり

日々の屈託の牢獄の中で

自身が手にすることのできなかつた

無数の光の残影に 向かい

届かぬ祈りを 捧げ続ける

彷徨

その時

総ての人々が 影を失ってしまった街に

迷い込んでしまった

青白い月を仰ぎつつ

懐かしい場所を追い求め

無数の路地をさまよう

路地の先には

銀色の瞳を持つ

愛らしい老婆が

澱んだ水たまりを見つめながら

何やら 無性に懐かしい響きを

口元から漏らしていた

その響きの漂う一帯は 聖域の如く

灰白い光に包まれ

現世の苦難から

程よく 距離を置いて存在していた

銀色の瞳を持つ老婆は

時に婀娜な声で

何やら 甘い呪いの言葉に似た響きを

道行く者たちに解き放ってきた

心を鎮め 老婆の言葉を聞き分けようとしたが

彼女が何を伝えようとしているのか

私には まったくわからなかった

影を失った私は

影の無い老婆を眺めつつ

現世に戻るかどうか

ずっと 考えあぐんでいる

窓辺にて

黒一色の視界

なんと深い夜

この窓辺に立つと

お気に入りの方が満喫できる

闇特有の けだるく 甘く

どこか不安な匂いに

ぼんやり酔っていく

夜をも引き込む力

なんと暗い闇

この窓辺に立つと

奈落の底が迫ってくる

地獄特有の おぞましく 高雅で

なんとも救いようのない響きに

かたく耳を閉じる

窓を開け

異界の空気を部屋に招き

夜と戯れ 闇に崩れる

なんと心地よい空気

なんと甘味な月の雫

夜が沈下を始める

ゆく当てのない場所に向かい

黒い大地は 崩壊の一途を辿っていく

百野虎子 (38) 山梨県

故郷

川上から迫りくる

細かい雨のかたまりを

私はホームセンターで買ってもらった

安い自転車に跨り

朱色の欄干に片足を引っ掛けたまま

まばたきもせず全身で受け止めていた

あたりは一瞬にして薄暗く

まつ毛に水滴が重い

一体なにがあるというのだ

この変わりやすい天気には振り回される

空っぽの私に

かつてのニッケル鉾山跡にそびえる

真つ黒い煙突が無言で私に迫ってくる
人の意見を自分の意見にしては
後から粉々に打ち碎かれる蛇紋岩の私に

誰のせいなんだ誰の

細い溝にしみ出す

金気の多い赤茶色の水が

私の心にへばりつく

大声上げて叫びたい

でもへばりついて叫べない

焦りと傲慢さで駆け抜けた道

振り返っては恥ずかしい

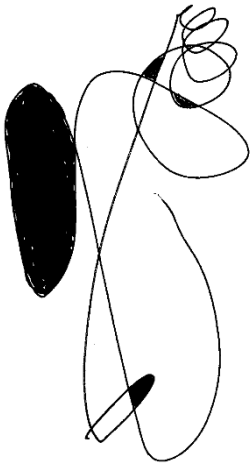
これは過去の話なのか

あの重たくのしかかる雲も

真つ黒い煙突も赤茶色の水も

振り払いたくて飛び乗った

ディーゼルエンジンの青いワンマンカー
朝の通学途中の賑やかな車内で感じた
自由と孤独を忘れるな
私を今も走らせる
私の故郷を忘れるな



幸あゆみ（55）大分県

まくら木

名も知らぬ駅の片隅に

たんぽぽの綿毛を飛ばし

六月に雨色の紫陽花を咲かせた

どこの駅かも分からない

目の前には枕木が横たわって

此方を見ていた

これが母なのか？

一本づつ歩き続けて

行けば辿りつく？

枕木の旅案内人は色とりどりの

花模様を見せてくれ

時には嵐で花びら全滅なんて事

もあつたつけ ふつ痛かつたつけ

今まくら木を枕にして

横たわっている

ボクの茎に三週間毎に

雨のヤイバが突き刺してくる

さあ来年の六月はヤイバの雨は

ボクの頭の上に雨色の紫陽花を

届けてくれるのだろうか

生の為にはヤイバの雨を

この枕木を傘にして

必ず終点の駅の名を必ず

見届けて旅を終わりにする

芦田晋作（50）東京都

櫨の木の下で

そこは

話すばつてよぐね

妄想のな

妄想のわ

櫨の下だけい

選ばいだ生命だけが集える沈黙がある

火傷の跡は

年ごともに

故郷の川のようになつてぎだ

父よ

もう帰つてもいが

今では

飛行機雲ば

追ってらどいう

母よ

なば 追いがげに行つてもいが

火傷すた日のごどは

川さ笑顔流れでらのはいごどなのだど

もう何がどひとづになれるのならいのだ

もう何がど離れでねのならいのだ

もう何がでなえばなねどいうものはなんもねのだ

櫛の木はまだたげか

夏には

でつたらだ日陰つぐりますか

わつきやまだ妄想の中はつけでらんず

出すてけ

出せますか

近岡 礼

悪人正機

萎れている薔薇

枯れてもいいのに　それが私なら

崖に群がる竹

あの時の衝動のように

始まりはどこに

私は私であつて私ではない

蠟燭に照される私の顔を

見てはいけない

悪人正機の寺に生まれたゆえ

ヨーロッパのどこだったか

裸の上半身を自ら鞭打つ集団に出会った
私は
不可解な自分を問うことしかできない

郷里氷見の魅力は、地霊にある。上日寺の観音堂で彫ったと伝わる室町時代の能面師・氷見宗忠の数点の能面は靈氣に満ち、漁師のデスマスクを象つたといわれる。境内にある樹齡千年の銀杏は靈氣を増幅させ、訪ねてきた馬場あき子氏は、「大銀杏大黃落の秋の陽に泣かで物言へ氷見の瘦面」と詠んでいる。氷見湾の水平線に聳える銀嶺立山も、やはり美しさを超えて靈峰というに相応しい。

かつて月刊誌「芸術新潮」に日本の巨木シリーズがあり、二本目に氷見の椿が取り上げられた。その老谷の大椿は、怨霊をテーマにした逸話を持つている。

氷見を舞台にした木崎さと子氏の『沈める寺』（芸術選奨新人賞）は、氷見の地霊を呼び覚ました小説と言えるのではないか。

東京の従兄が氷見の中心街を通って、「死んだ街だ」と言つてのけた。あ、やはりそうなんだと納得した。ある友は、「君はすたれ感が好きなんだね」と言つた。なるほど、そうなのかもしれない。自宅から眼と鼻の先にある湊川を散歩すると風がどこからともなく吹いてきて、旅情に身を委ねるのである。（礼）



氷見宗忠作 瘦男